



昭和33年7月6日撮影の取手町の七夕(取手市教育委員会所蔵)



昭和13年1月1日 相馬町紫榮勉強商店双六(取手市教育委員会所蔵)



赤松貞次郎が描いた明治32年頃の岡堰
(取手市立山王小学校所蔵「山王村沿革誌」より)

絵図・地図・写真で見 る郷土の歩み

会期中無休 / 入館無料

平成24年2月20日(月)から4月20日(金)まで
午前10時から午後4時30分まで(入館は4時まで)

取手市埋蔵文化財センター

〒302-0007 取手市吉田383 TEL0297-73-2010 FAX0297-73-5003

開催にあたって

高い所から風景を見渡したいと考えるのは、人間の持つ本源的な欲求と言えます。さらにその風景を記憶の中だけではなく、記録に留めるために絵図や地図が作成されました。社会の発達につれて、さまざまな局面で絵図や地図の必要性がたかまり、目的に応じた絵図や地図が作成され現在まで伝えられたのです。写真もまた、実際に目にした風景を記憶だけではなく記録に留め、後々までも伝えたいとする欲求から生まれ、発達してきたものです。

私たちは、こうして残されてきた絵図・地図・写真から、現在では姿をかえてしまった過去の風景を顧みることができるとしています。今回の企画展では、市域にかかわる絵図・地図・写真を中心に、古文書や刊行物などの文献資料も加え、郷土の歩みを視覚的にたどります。これによって何が変わり何が変わらなかったかを知るとともに、将来に向けて何を守り伝え、また何を記録に留めなくてはならないかを考える縁（よすが）となればと考えます。

最後になりましたが、今回の企画展の開催にあたりご協力をいただきました関係各位にたいしまして、深甚なる謝意を表して開催のあいさつとさせていただきます。

平成24年2月

取手市埋蔵文化財センター

講演会

「水戸街道を行く 一道から学ぶ社会学」

講師：千葉隆司氏（かすみがうら市郷土資料館学芸員）

日時：3月17日（土）、午後1時30分から3時まで（開場は1時）

公開講座（取手市郷土史研究会と共催）

「伊奈半十郎忠治と岡堰・相馬二万石」

講師：埋蔵文化財センター職員

日時：4月7日（土）、午後1時30分から3時まで（開場は1時）

講演会・公開講座とも会場は、井野公民館（井野2-17-17）会議室、定員90人（当日受付順）

駐車場が少ないので、公共交通機関をご利用ください

（取手駅東口から関東鉄道バス井野団地循環で井野公民館前下車すく）

展示説明

3月3・4・18・20・31日、4月1・14・15日：午前11時と午後2時から

3月17日、4月7日：午前11時から 予約不要

例言

1. このパンフレットは、平成24年2月20日から4月20日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第31回企画展「絵図・地図・写真で見る郷土の歩み」にともない、発行されたものです。
2. この企画展の企画とパンフレットの執筆・編集は、当センター職員の飯島章が担当し、その他職員の協力を得ました。パンフレットの執筆にあたっては出典の注記は略し、主な参考文献の一覧をあげてあります。
3. この企画展の開催にあたり、次の方々からのご協力とご助言をいただきました（敬称略）。記して深謝の意を表します。

海老原千義、柿沼利治、木村廉、小池康久、杉澤萬造、染野修、野々下甲子男、広瀬篤、広瀬実、細田清巳、谷口昭進、渡辺未子

印西市教育委員会、岡堰土地改良区、取手市立山王小学校、崙書房出版株式会社

主な参考文献

『取手市史』通史編Ⅱ・Ⅲ、近世史料編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、近現代史料編Ⅰ・Ⅱ、石造遺物編、『茨城県指定有形文化財・取手市指定史跡 旧取手宿本陣染野家住宅修理工事報告書』、『取手市郷土史資料写真集』、『藤代町史』通史編、『藤代の歴史散歩』創刊号、鬼怒川・小貝川流域を語る会『鬼怒川・小貝川 水と暮らし』

中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験』、杉本史子・磯永和貴・小野寺淳・ロナルド トビ・中野等・平井松午『絵図学入門』、土浦市立博物館第八回特別展『絵図の世界 一ふるさとの風景の移りかわり』、龍ヶ崎市歴史民俗資料館『企画展 絵図に見る龍ヶ崎』、財団法人日本地図センター『いまに残る郷土の文化遺産 つくばの古地図』、長谷川一『あびこ版 水戸土浦道中絵図』

茨城新聞社『写真記録 茨城20世紀』、『取手・龍ヶ崎・牛久の100年』刊行委員会『目で見る取手・龍ヶ崎・牛久の100年』、佐久間好雄監修『図説 稲敷・北相馬の歴史』、田中創・倉科輝晃・大島志津子『保存版 稲敷・龍ヶ崎・取手・牛久の今昔』

1. 岡堰と相馬二万石

江戸時代に入ると、幕府は関東各地で河川の改修や堤防の構築、用悪水路の開削などの治水・利水政策を推し進め、それまで開発の手が及ばなかった大河川流域の新田開発を行ないます。小貝川流域でこの事業を行なったのが、関東郡代の伊奈半十郎忠治でした。伊奈忠治は、文禄元年（1592）に生まれ、承応2年（1653）6月に62歳で没しています。忠治は当初は初代将軍徳川家康、後に2代将軍秀忠、3代将軍家光に仕え、関東を中心に民政に手腕を振るいました。

さて江戸時代以前の小貝川と鬼怒川は、現在のつくばみらい市寺畑のあたりで合流し、ほぼ小貝川の流路を乱流しながら利根川に合流していました。伊奈忠治は、つくばみらい市杉下から大木丘陵を開削して、守谷市野木崎で利根川に合流する新河道（現在の鬼怒川）をつくりました。同時に寺畑で鬼怒川を締め切り、寛永6年（1629）には小貝川と鬼怒川を分離します。また江戸時代以前の小貝川は、現在よりも下流で利根川と合流していました。これを忠治は、市内戸田井と利根町羽根野の間の丘陵部を掘り割り、寛永7年に小貝川をここで利根川に合流させています。

この事業の完成により、小貝川の流量が減少しました。さらに忠治は、寛永7年に岡村で小貝川を堰き止める岡堰を設け、用水路や排水路を開削し、また用水を取り入れたり余分な水（悪水）を排水するための坎樋（現在の樋管の相当する施設）を設置して、小貝川流域の新田開発を進めます。後に岡堰の用水を使用する村々は32か村となり、岡堰用水組合を構成し相馬二万石と呼ばれるようになります。岡堰用水組合の32か村は、大留と高須の2か村の一部が龍ヶ崎市となっている他はすべて取手市内です。

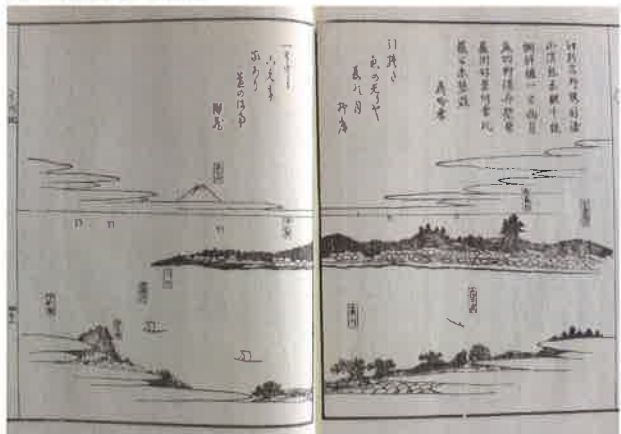
貞享5年（1688）、岡村と小貝川をはさんだ常陸国筑波郡中平柳村・下平柳村（現つくばみらい市）との間で、村境をめぐる争論が起こります。同年5月9日には、幕府評定所で裁許（判決）が出ますが、この裁許状の裏側には当時の岡堰と小貝川が詳細に描かれています（写真は裏表紙）。



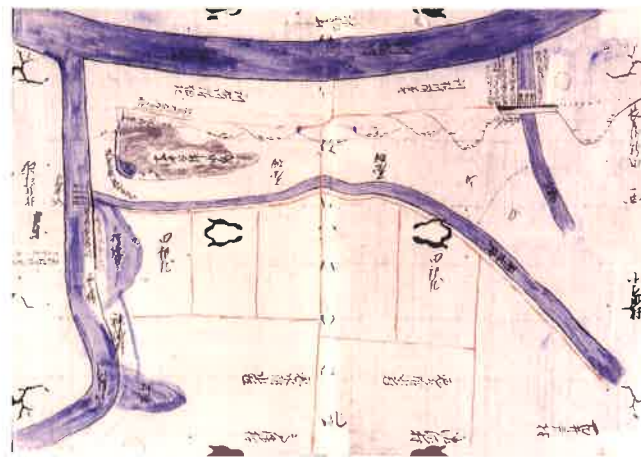
小貝川と鬼怒川の分離地点の絵図（取手市教育委員会所蔵）
右上が鬼怒川で下が小貝川です。中央やや右寄りの寺畑村の所で、両川は合流していました。



岡堰絵図（取手市教育委員会所蔵）



赤松宗旦著『利根川図志』（斎書房復刻版、取手市教育委員会所蔵）に描かれた小貝川と利根川の合流地点



明治3年10月 小貝川・利根川・相野谷川絵図（木村廉家文書）
上が利根川、左が小貝川、右が相野谷川です。

明治時代に入ると、明治16年（1883）には水利士功会が創設され、岡堰は北相馬郡長の管理下におかれました。

明治19年4月には、北白川^{よしき}宮能久親王が岡堰を訪れ、風光明媚なこの地を愛でられて桜の植樹料を下賜されました。時の北相馬郡長広瀬誠一郎は、この植樹料で桜の木を植え、やがて岡堰は桜の名所となりました。

明治20年6月の小貝川の大洪水では、堰堤が約50メートルにわたって決壊しました。この時の復旧工事では、北相馬郡長広瀬誠一郎により洋式技法が初めて取り入れられ、元々はレンガの堰枠に改修されました。明治23年には、水利士功会は普通水利組合となります。次いで明治31年にも岡堰は損壊、翌年の改修工事により、12連のレンガ製の可動堰と4連のレンガ製の洗い堰となりました。レンガ堰の建造費の内訳は、県費2万4390円に対して組合負担額2万9800円と地元の負担額が大きく、長期の借入金で賄われました。こうして完成したレンガの堰は水面に映え、緑多い周囲の景観にも溶け込み、春は満開の桜を求めて多くの花見客が集まりました。

昭和8年（1933）、内務省は小貝川の計画高水流量や岡堰の用水不足に対処するとともに、小貝川の治水強化のために、小貝川の改修に取り組みます。山王村には、小貝川改修事務所山王工場が設置されました。新たに作られる堰はコンクリート製で、昭和12年2月にまず可動堰の改修に着手し、昭和21年3月に竣工しました。洗い堰の改修は昭和28年11月に着工し、昭和35年3月に竣工しました。昭和恐慌から太平洋戦争、さらに戦後の復興期にかけて行なわれた一大事業であり、当時を知る人は「山王のニューディール」とも呼んでいます。

昭和55年、建設省は小貝川の計画高水流量の不足を解消するために、岡堰を全面可動堰に改修することにしました。改修工事は昭和58年10月に着工、13年の歳月をかけ平成8年（1996）11月に長さ約300メートルの新堰が竣工しました。現在岡堰の中の島には、レンガ堰の一部とコンクリート堰の可動堰1連が保存され（写真は裏表紙）、かつての岡堰の面影を今に伝えています。



レンガ堰時代の岡堰（個人蔵）



現在の岡堰



コンクリート堰時代の岡堰（取手市教育委員会所蔵） 左から竣工前の洗い堰、竣工後の洗い堰、同可動堰です。

2. 水戸街道と町並みの移り変わり



宝暦8年9月 土浦道中絵図（個人蔵、土浦市指定文化財）に描かれた利根川から取手宿の場面（写真パネルで展示します）。

江戸時代はじめの水戸街道は、我孫子からは東に向かい布佐で利根川を渡り、布川から北に向かっていました。この街道沿いには、今なお一里塚の跡や伝承地が残り、江戸時代の初めには重要な街道であったことがわかります。

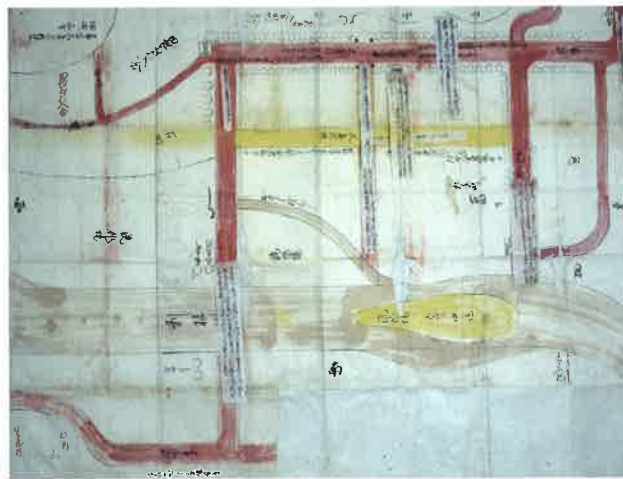
寛文6年（1666）の絵図によると、取手の町並みは、守谷と佐倉を結ぶ「佐倉道」に沿って利根川の河原の方に向かってありました。ところが寛文6年の利根川の大洪水で被害を受けたため、利根川に平行する町並みに改められたのです。やがて水戸街道は、我孫子から北上して利根川を渡り、取手から藤代に達するように改められました。

さてこの水戸街道の付け替えにともない、大鹿村の人びとは街道沿いに移住してきました。大鹿村の移住は元禄10年（1697）には終了したようで、この時から利根川の渡船場が現在の大利根橋のあたりに設けられました。また藤代宿は、藤代村・宮和田村・片町村の三か村で構成されていました。17世紀の後半頃に次第に水戸街道が取手や藤代を通るようになり、それにあわせて取手と藤代が宿場として整備されていたと考えられます。

水戸街道を描いた絵画資料は、東海道などと比較するとあまり多くありません。その中であって、土浦藩土屋家第4代藩主土屋篤直が、宝暦8年（1758）9月に参勤交代で江戸から土浦に戻る道中目にした光景を描いた「土浦道中絵図」は、貴重な資料です。千住から土浦藩領の北端にあたる中貫原までが詳細かつ色彩豊かに描かれ、約250年前に当時の人びとが見たであろう水戸街道の姿が眼前にせまってきます。



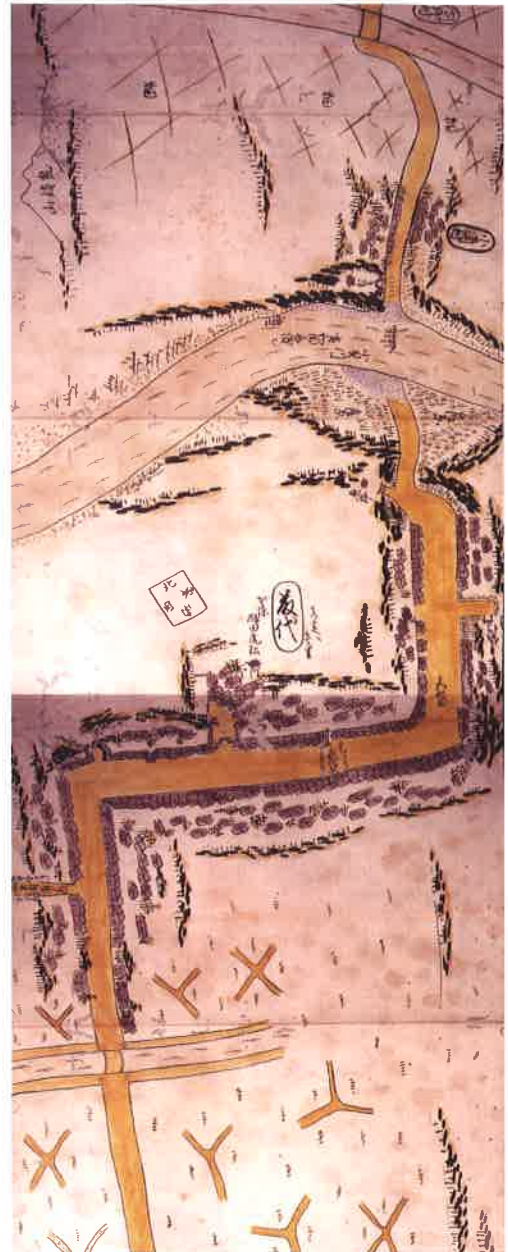
寛文6年 取手宿絵図（梁野修家文書）
利根川の河原に向かって町並みがあった様子わかります。



明和8年 取手宿・大鹿村絵図（梁野修家文書）
現在と同じに利根川に並行して街並みが続いています。

江戸時代に宿場として栄えた取手・藤代は、明治以降も地域の政治・経済・交通の中心地として発展しました。明治11年(1878)には取手に北相馬郡役所が設置され、醤油・酒・酢などの醸造業が栄え、利根川の水運を用いて一大消費地である東京に出荷されました。明治22年、前年に公布されこの年から施行される「市制・町村制」により、全国的に大規模な町村合併が行なわれました。現市域では、取手宿を中心に取手町、藤代宿を中心に相馬町が成立しますが、この2町以外はすべて村でした(稲戸井村・高井村・寺田村・井野村・小文間村・久賀村・山王村・高須村・六郷村)。明治29年には日本鉄道土浦線(現JR常磐線)の田端・土浦間が開業し、取手・藤代の両駅が設けられました。昭和5年(1930)には大利根橋が架かり、交通の重要地点としての取手・藤代の地位はゆるぎないものになります。取手は「北相馬郡の首都」、「茨城県の東京への玄関口」とも呼ばれるようになってきます。

昭和30年には、昭和の町村合併により旧取手市域と同じ取手町と藤代町の2町が成立します。昭和30年代からの高度経済成長期には、東京の通勤圏に組み込まれ、日本住宅公団により井野団地・戸頭団地が建設され、民間業者による宅地開発も行なわれました。また昭和35年にはキャノン取手工場、昭和38年には東京鐵骨橋梁取手工場、昭和45年にはキリンビール取手工場、昭和46年には日清食品関東工場と、大企業が進出してきました。人口の急増にともない、取手町では都市計画が策定され新住居表示が取り入れられるなど、都市基盤の整備も進展しました。昭和45年に取手町は市となり、平成18年(2006)には取手市・藤代町が合併し取手市となって現在に至っています。



宝暦8年9月 土浦道中絵図(個人蔵、土浦市指定文化財)に描かれた藤代宿から小貝川の場面(写真パネルで展示します)。



昭和24年頃 取手町都市計画図(取手市教育委員会所蔵)
昭和22年12月18日、当時の取手町は内務省から都市計画法の指定を受け、29日には都市計画区域に指定されました。



昭和30年代から40年代前半頃 取手町鳥瞰図(取手市教育委員会所蔵)

3. 飛行船SS3号と地域社会

大正13年(1924)3月19日の午後12時50分ごろ、戸頭上空で海軍の飛行船SS3号が爆発・墜落して、搭乗員5名(高橋道夫少佐、片桐雄司大尉、助川与四郎一等兵曹、伊奈中二等機関兵曹、高橋善三郎三等兵曹)が殉職するという事故が発生しました。飛行船SS3号は、この日阿見村(当時)にある霞ヶ浦海軍航空隊の基地を飛び立ち、神奈川県横須賀で演習を行なったのち、帰路戸頭上空で爆発したのです。飛行船が墜落すると、すぐさま付近の住民がかけつけ、手やシャベルで土をかけ消火に努めました。鎮火したかにも見えても、^{きのう}気囊の布片を引き出すと再び発火するという惨状のなか、懸命に搭乗員を救出しようとしたが、搭乗員5名はすでに殉職を遂げていました。

翌3月20日以降、事故現場は訪れる人がひきもきらず、戸頭青年会は翌21日に案内板を建てています。人びとはお賽銭をあげて殉職搭乗員の霊をなぐさめ、戸頭青年会では3月26日に賽銭箱を作ったほどです。3月25日には、北相馬郡長代理、近隣村長、稲戸井村・高井村の消防士、小学校生徒などおよそ1000人が参集する盛大な追悼会が地元で開催され、4月15日にも戸頭青年会の主催と思われる追悼会が開かれました。4月に入ると、航空船エスエス三号殉難者遺蹟保存会が結成され、殉難碑建立の運動が始まります。また4月19日には、新四国相馬霊場八十八か所の参詣者を中心に招魂碑建立資金の募集が始まり、4月25日までで150円も集まりました。こうした多くの人びとの努力と浄財により、大正14年3月19日に飛行船墜落地点に殉難碑が建立されました。

殉難碑建立地点は、昭和48年(1973)に始まった戸頭地区の土地区画整理事業の用地にかかったため、碑は戸頭東小学校の北側に新設されたもくせい公園内に移設されました。現在でも地元の人びとによる清掃や献花が続けられており、事故の記憶をとどめています。



飛行船SS3号絵はがき(取手市教育委員会所蔵)



飛行船墜落地点での集合写真(横瀬正太郎氏所蔵)
大正13年3月25日の慰霊祭での撮影です。



殉難者遺蹟碑略図(大正13年 遺蹟碑建設設計書、海老原千義家文書より)



もくせい公園に移設された現在の殉難碑(中央)、右は大正15年4月19日建立の殉難記念碑建立ノ由来記碑、左は殉職軍鳩之塚碑です。



貞享5年5月9日 岡堰裁許絵図(取手市教育委員会所蔵)



岡堰中の島に保存されているコンクリート堰(可動堰)



大正6年10月31日 下総取手町明細地図(取手市教育委員会所蔵)



上2点とも昭和29年1月24日撮影の雪の取手町(取手市教育委員会所蔵)



相馬霊場案内略内図(昭和4年1月20日 相馬霊場案内、取手市教育委員会所蔵より)
左側に「航空船殉難碑」と書かれ、殉難碑が新四国相馬霊場巡拝のコースに組み込まれていたことがわかります。